



和漢文操

銘類 傳類
帛索類

七



5
2236
7



門利95
種2236
卷



和漢文操卷之七

○銘類

鑑塔銘

並序

蓮一房



今歲享保下酉秋八月十六日有當先師
亡名之七面忌則構一面向四面之墓取而
祠堂曰文星觀居謚名曰梅老佛歷然則
此塔之厚鑑也圓直一尺之寸而面在者
歐今之謚名背尔者合誌年與月矣其
地者合造立美濃國山縣郡之輪山之西

北黃山禪刹之塔頭梅泉庵之西園止乎
山者徒本備水竹之奇麗而先師一家之
菩提寺也抑謂文星意者出一行禪師之
一掌經而天文星者我師之主命也其頌
曰余遇天文秀氣清滯腹文章錦繡成云
然則我師之所遊文章天生文質而非吾
輩之可談實覺觸月花之折也則吾輩無
神助之操要耶祖翁嘗稱我師之文學而
以彼之文章換我之俳諧則我者可遊文
章彼者可狂俳諧與者人麼有年榮之遊

品而文章者慰老之起卧俳諧者交人之
好惡則也抑社見難彼之遺快了則文章
及故者在武陵而下預扶以之文庫可任
我師之點換與手誠思此等之遺命則今
將讚文星之二字而可不題祠堂之面門
矣耶梅菴佛之之字者作師之標號不舉
在世之名數者所憚自稱之橫柄也采斯
而鑑之為用也人之視之愛之人之視之
憎之憎愛者唯在人之一好醜而鑑者從本
無心也則多建置一面之鑑塔而世々將

家我師之本情與也率哉錄先師之行狀
 則入學者延寶之始也采其頌詠山寺之
 紅葉連歲入仔呂波之詞而為響音勃之
 尺名者年漸十一之秋也來多業俳諧之
 臘則尤謂之十六年矣斯而不撓世上之
 是非莫方東華西華之名而東者無松鳩
 之待人麼西者踞坑築之不知浦山而潛
 身於憎愛之隅了則置心於虛實之歧矣
 栗葛松原年有繕俳諧之皮毛居續五論
 午有調俳諧之姿情歷其外夜話云日記

云十論者增而白馬之眼藏而論俳諧
 與俳諧之有差別古今事了則從矣儒仙
 老莊之扁學者各詩歌連俳之備出習當
 時粉成茄子執子之宗近而不令其齒看
 其衣假令可為我行之荷擔人麼古名者
 鉗口新輩者歎耳而憎愛者例之無在時
 帛矣在者不察建立之意地相手鑑之
 影坊而認虛認實則也爾有則從彼忘此
 從此忘彼也則千歲之先者可拜彼人千
 歲之後者可拜此塔矣夫

銘曰

鑑本無相
以吹虎嘯
可魚遊水
文章難操
月見如磔
交和干溪
曾家無級
勸温耳州

喻物有心
雲起龍吟
不鳥擇林
錦繡易經
心爾似金
叶訓與音
孔行有參
懲厲人莫

其虛其實

棧鋒凜々

○註曰△之輪山、清浦、袋、双、中、之、所、園、之、跡、取、之、輪、
心、非、の、内、存、き、し、し、そ、の、非、の、官、所、有、通、夜、物、誌、
表、ニ、出、り、△黃山、北野ノ、刃、實、ニ、在、テ、山、ヲ、雲、其、下、
△イ、寺、ヲ、大、智、ト、云、フ、藝、見、義、作、守、ノ、建、立、ニ、テ、玉、浦、一、派、
ノ、本、山、ナ、リ、境、内、ハ、七、万、五、千、坪、ニ、テ、所、々、ニ、十、景、ノ、各、ヲ、
備、フ、雲、土、園、ハ、寺、内、ノ、裁、園、ナ、リ、塔、頭、ハ、十、二、坊、アリ、テ、
梅、泉、ハ、其、一、坊、ナ、リ、其、各、ヲ、下、谷、ノ、清、水、ト、云、テ、一、郡、
無、双、ノ、麗、水、アリ、林、蔭、ハ、總、テ、竹、ト、松、ト、ナ、リ、△行、禪、師、
△唐、高、僧、傳、ニ、在、テ、占、文、ノ、知、識、ト、シ、一、書、年、經、ハ、此、禪、師、ノ、
作、ニ、テ、僧、家、ノ、才、子、ヲ、美、長、フ、時、ニ、其、子、ノ、吉、凶、ヲ、定、ム、ル、

書ナリ始ニ余官國ヲ出シ次ニ十二星頌アリテ又三
ハ才六ノ至命ナリ題ニ八仙道天文星トアリ其頌曰
余遇天文秀氣清聰明知自惠意惺々田也
秀身清吉滿腹文章錦繡成

其謀星至命聰明佐利學識遇人作事和美
若逢貴福藝相助者定為鰲魚頭狹口
虎榜登名金階玉階之人也若得權及有
文武多才乃為上命若遇破厄孤驛及
重者乃多學少成不為書筆文墨之輩必
為雲遊湖海之人乃手藝術士之下命止
按之貴福以下孤驛三九字八仙道天貴星ト云
道天馭星ト云十二星ノ各自ナリ去ル六年月日特シテ

掌中國ヲ美一曰ニ或ハ天貴ノ吉星ニ遇ニ或ハ天馭凶星

ニ遇フ國ヲ美ルニ師傳アリ細奉スニ暇アラズ ●長恨歌

天生麗質難自棄 ●謝美運傳嘗於永嘉西

堂思詩竟白玉就為夢見惠心連即保池塘春

草生大以存正常云此語有神財非吾語云

今論為輯抄難波ノ遺狀七通アリ中ニ撰折一牧ノ遺物

覺書ナリ才五ノ書一文章ある如等之ハ枚回スル

文章のくま子相の支考する為に撰換し △文星觀之文字

ハ撰額ヲ燒桐ニ紺青ヲ入テハ望望ノ公家文字ナリ

筆者ハ賀金城ニ聞フル富田太椿ナリ本ヨリ馭子各高

シテ古篆新篆ニ季シク或ハ八分韻府ヲ著セリ

△梅必佛ハ之字ハ草跡ナリ和泉ノ青石ニ白河石ヲ以テ

其臺トスニ重ニシテ互尺餘アリ筆者ハ洛ノ井出一適ナリ
 此老ハ井出家ノ嫡統ニテ越ノ福居ニ産シテ洛ノ淳以坊ニ
 住リト卓犖不羈ノ凡人ナリトフ ●伊呂波ノ歌ハハ獅子
 庵遺稿ノ夜話ニ我むし〜のほ〜も〜此れ家
 とつ〜色と〜あ〜ちりちりお〜あ〜と〜し〜に
 所坊や〜も服山のみ〜もあ〜と〜秋風と所〜り
 さ〜と我後ノ古風と字お〜し〜かく〜と〜ち〜と
 二並母を〜い〜い〜あ〜あ〜の〜く〜と〜と〜知の
 女〜も〜い〜と〜り〜と〜何〜身〜接〜ス〜此夜話ハ祖公羽ノ
 遺訓ニ我滅後此年ニシテ俳諧ノ上手モ出キ古又ナリ
 宣王ノ其訓ノ評詞ナリ△滕王閣記ニ勃と尺微余ト人
 書生云と尺微余ト八重部北月ヲ云ヘリ △本朝文鑑

十名説 東ノあ〜と〜東華坊と〜い〜あ〜と〜
 西華坊と〜子華ノ子〜ん〜色也〜と〜ア〜り且始東華集
 一と〜西七佳ホト云元東西二集ノ各ニ標シリトフ △侍人モ
 不知モ古歌ノ裁入ナカフヲ不知火トハ塊集ノ松詞ナリ
 △葛原松原ハ奥州行脚ノ俳談ニテ△續五論ハ筑紫行脚
 ノ遺訓ナリ續字ハ葛原松原ニ續リトフ△東西夜話ト
 云〜白木日記ト云〜何レモ俳諧ノ附方ナリ △俳諧十論
 ハ芭蕉家ノ大綱ニシテ白馬ノ西文字ヲ奉タレハ佛家ノ
 正法眼蔵ト云〜涅槃妙心ト云キナリ△鑑且影坊ハ一篇
 ノ結語ナリノ接スルニ十論以下ヨリ認虚認實ニテ十論
 一部ノ註釈ナラフ儒仏詩歌ノ存表貶ヲ断リテ影坊ノ
 二字ヲ以テ例ノ言語ヲ散シタル詠々詠諫ハ更ニ言ハス

微中解紛ノ絶妙ト稱スレテ千歳ノ字ハ太玄經ノ取意ナリ

銘解

△魚鳥ノ對ハ詩經ノ取意ニテ魚ノ天遊ヲ之トシカ
魚ト鳥トヲ自他ニ成ル等ハ摘採ノ筆力ニテ格ニ翻轉
ノ絶妙ト稱スレシ或ハ扱林トハ夜間扱木ト身將臨ト云
例ニ古語ノ取意ナリ △文章錦繡ノ對ハ昔年經ノ頌文
ナカラ難易ノ字ノ儻ヲ見ル △昔孔ノ對ハ顛倒格ナリ
孔子ノ道ハ曾參ノ傳ハ曾參ノ道ハ子思ニ傳フ假ハ子思
ノ名ナリ拊スレニ一對ハ祖翁ニ東華坊アト蓮ニニハ
子思ナレト銘者ノ辞美ヲ演ナカラニスヲ以テ四ノ合ニ
對セル顛倒ハ例ノ常法ニテ文ニ錯綜ノ絶妙ト稱スレシ
勸懲ノ對ハ字意ノ儻ナカラ温厲ノ再々ラ尺ニセリト云レ

○漢云此銘をたねて實録として其所の事とあり
りもこの銘をたねて評名も得るおのほりもこれ
のうへて百世の名をたねてしむるもまたこれ
の遺稿の秘記なり也漢ノ命官の古文をばは
今階玉階の名をたねてしむるもまた此破厄孤馭の
凶星ノ建るも子孫の術士のおもひあてせし
我師の文章と云ふこと此の神の常と云ふ
ことハ此の漢の大家所として之を云

軌銘 並序

天章吹

世間ノ庚申のおとしむるもむるもむるも
視聽言

の之歳より二足の儀と擲く字一視する聴する
言するのるちりより此れの中にもいとありて福
の内あれども魯此廟は此の如くまゝして國の
そまじしをこやうい言とほくまむの禮今孔子は
此はくはつとを近くを國に歸しつと地
地より居て寸一秋の風を我家の年の歳
ありともや早ひそはと歳とまふと月と日と
ある所の歳として流存する色を我として名ひ
ぬむるの如くもむかはんものなりと見言ひせり
まゝくこけして老めらるるも例の如く今も

後より他借してはて他人のよりありとせよ
そしてまゝを言はぬありかゝる自己は不自然
と加つて入れたる所をかりて此處を是と名を
の稱しそを是と名を是の歳といふなり也

録
甲

稱しつはを同とて耳にあらはし
不食やしては自備の所はあれどもいむ此
名も中々もるるをいふとほくまむ
稱しつはを同とて耳にあらはし

一、實とも認められ、鮫とちよりの塵も、浮
 とれ、塵をうらむるの用ありとや
 孰らく、許由の鳴と増ち、空也とて、
 おもわれ、韓愈のな達と、おろけと
 け、けとて、おとすまふれ、
 秋の毛も、もるの非、
 又、石の大い、み、み、
 殿、
 〇註曰、視聽言動、四歳之前、
 入太祖右稷之廟、有金人、

慎言人也、中畧、是禱之、
 論語異端註、當如、
 字毛論語ノ詞ナリ、
 乎能、
 及父、
 送孟東野序、
 鳴、
 韓子、
 筆端、
 貽我、
 〇評、

文選卷十

九

猪、祝、饗、言、め、之、と、都、一、新、言、の、子、と、猪、了、以、之、
詳、之、を、た、の、嗜、と、考、一、作、者、と、越、の、福、井、と、流、
て、能、活、一、坪、の、者、の、あり、氏、と、天、井、と、一、有、底、而、
と、確、と、一、昨、養、伯、免、公、志、年、の、お、あり、と、我

俎板銘

岸昨養

日新、今日、日、右、
豎、象、一、年、住、
之日、節、獻、鶴、
惠、王、何、遠、厨、
子、攘、軍、隱、父、

朔、云、今、晦、云、
橫、準、四、時、曠、
七、種、粥、雜、芹、
孔、子、未、學、軍、
臣、亨、兒、鄉、食、君、

柳、鱣、身、欲、濟、

解、鱣、鬚、為、斷、

鐻、矛、頻、令、鄉、音、

納、豆、坐、所、聞、

天、命、畏、河、豚、

我、生、且、海、雲、

爭、忘、葛、葛、鏞、

縱、嗅、雄、雉、董、

寧、識、無、絃、趣、

所、見、而、且、有、文、

註曰、書、經、湯、之、盤、銘、曰、日、新、日、新、按、之、此、後、語、俎、板、
ノ、日、用、三、饗、晴、ア、ラ、云、ト、テ、新、古、ノ、字、カ、テ、添、タ、リ、論、語、云、
吉、相、饗、羊、八、俎、板、銘、ノ、寄、セ、ニ、テ、爰、ハ、晦、朔、ノ、佳、節、ヨ、リ、年、月、時、
ノ、日、用、ヲ、見、ル、シ、△、之、日、節、ニ、鶴、ノ、為、ト、テ、又、ハ、奉、膳、式、ノ、由、後、
ニ、ヤ、尋、又、シ、△、七、種、粥、ハ、奉、ル、及、又、△、子、孟、子、惠、王、章、有、
肥、肉、云、宣、王、章、君、子、遠、在、厨、云、按、ス、ル、卅、句、ハ、在、子、毛

梁惠王ハ危丁ノ所法アハ宣王ノ如ク危厨主返スト同書
 二同語ヲ翻轉セシト等ヲ奪胎ノ絶妙ト稱スシ論語
 姐豆之古又則嘗聞之矣軍旅之古又未之學也
 ▲論語父攘羊而子證之子曰父為子隱子為父
 隱直在其中矣▲史記桓公曰易牙烹了我子快
 寡人尚可疑邪按スルニ對ハ羊ニ姐豆ノ孝行ヲ合
 兒ニ須食應ノ忠節ヲ顯ス君臣父子ノ對ハ更ニシテ
 又ニ意對ノ絶妙ト稱スシ ▲論語畏天命畏大人
 此接スルニ對ハ公私ノ用ヲ云テカラ河豚ト云ク海軍ト
 云ル物名ノ働ヲ見ルニ ▲自專談笑訓色と好む
 温飽のこくこく一著る麦坊のこくこく一著る豆房
 へ和子の所ありて首比弱く他儀のこくありと

▲論語山梁雌雉時哉子路共之之嗅而作按スルニ
 此一對ハ雌雉ト雉子ノ雌鳥ヲ云ト甚弱ノ連綿ニ對セン
 トテ論語ニ嗅字ヲ假テカラ雌雉ト一名ニ訓ニタル此等ヲ
 摘語ノ絶妙ト稱スシ ▲例明本傳ニ常撫無絲琴
 曰但識琴中趣何勞哉上声ニ云ハ論語質實勝文
 則野文勝質則史文質極之而然後君子也
 ○ほふ此語之十句十約トテ文欣顔のせとと
 めて了子し私の豹礎とゆらひととをへて後
 てと會て後信ちりこれとねたし能たのち
 ちんとする一を七はく一を偏の称よりおとす
 姐板の容と下をへ常と通る此等と求む
 より体中首比弱のこくとをけりて以折の執と

これやとて講し文所々概とてあるはこれ其の
實とありあはれと能治の意とありて是を
我々の文者とてつゝある也

本箱銘

並序

菅師冬

久々此天地と文庫とて中に月日はあり
かたれに古物とつゝは世よりたゞも
あるもてを一と歸するも人々も一とある
是人とてしゝるも一とては六藝の名に
あつては世に傳へり傳へり詞の世に人の

下千校の書物の押書とあるはまじりあはれ
おもしろき書物の字ありて是を油の流しつゝ
おと書雪のまじりてはちとては子文の
るやまはれし達して大所と書し
亂しゆめの録しつゝ一とては子文の
わらうしては花の流しとあるは我々の
ははしありては花の流しとあるは我々の
ははしありては花の流しとあるは我々の
眠らうては花の流しとあるは我々の
ありては花の流しとあるは我々の

あけぬとあまともな

其銘

智を志とほりて産み地は 假名と書るも花形は
 松のまろり流をまろりや 桐の節あき歌をわろく
 机と銘の目としやまことと ちよ花のいろははつる
 雲般をもれ移はげとも け田う書るも染く遊む
 ぬけおむとなくまねけと むしれはるもくせや桂

○註曰△平文子「万事帰一」云碧岩録「万法帰一」云△螢雪
 故夏ハ前ニ出タリ △達上ハ六門集ニ以心傳心不立文字

▲普書 邦隆七月七日仰て是日曝腹中書云

其銘 ▲在子カ蝶々夏前ニ出タリ ▲野詔述説 勸学院産

ハ書求マ轉ルトハ野詔ノ説アリ 或云雀 即僕隸名也トモ

或云学院園中有書真字號 呂建非熊 甲字トナリ

△淮南子 曾般仕楚王 作雲梯攻宋云 竹田ハ侍朝ノ

細工人ニテ多ク和漢ヲ對ヒシナリ △侍詔指あむし

の刺々此書印と感妻の妻化といをる所の血を

○浮云は然も隠見の字にありて 虚もあやうきと知れ

るやらむは流るる 予は儒師を北和漢の書籍と云ひ

ありて博学の名とせられも 志をねん達ナレ邦隆

の字とてふむ人の様なりて 用はるとけらるゝと

へまや況や冠と刺との鏡縁を削入 若中の方と云

一 作者と書中より別々本半鬼と極号と長城
の八の観と所より書とよく一魚とよく一書
名と万能磨とよく一書

炭取歌銘

此後、謎文ナリ評註
ニ及ニス椰子庵ニ
五寶ノ其一ナリ

蒼とるはまきりまろく
空と冬つらりと流

椰子老人

蠅打銘

並序

崎一秋

かゆと打物のそお抽とるる。實とるる双た

とちひいゑとるれ鉄炮とちひい法力かまは
をさちへきとちん人と殺はんりとりまを人
かむとて防くといふる理とまもちりり
長城と一炸の火油のちらひらひらはあり
仁の二孝と中とて魚とるるも推とはむも
射とるも射といふやまも射よへ射たは
とるちんても糖とほくまありとるも
あゝ政陽殿と糖とちんて機投のまお糖打
とるちんて糖の麻と糖とちんて糖と
はくちんて糖と軍と社席のちんて孔門の

敵うふあきまあり予を行はの罾打とていふ
たりく我右とおあさるやふしや法炮の
とと罾打といふは罾を打つていふ罾を
とれしらと柄とけりて曰

殺るふれ敵とゆさくあり

打るふれ罾とちふあり

胡馬不にちりやし

與叔克己の落あり

○註曰はれく竹五とてははるやの裏とてこれ
擲といふとてははるやの裏とてこれ

鼻下實下ノ字ヲ對ノ倒將ノ絶妙ト稱スレ
ノ下キ史記ニ出タリ△一炬火ハ阿房宮燬ニ在リ炬字
ヲ燧ト和訓ノ目答ナリ△論語ニ釣而不綱也射
△中庸慎其独也△憎罾射ハ效陽公ノ作ナリ
ハ殿ノ字ヲ稱スレ△家語ニ其征也還仲社
上云△與叔克己銘凡殿有生均也氣同
不仁也
○ほははれと屋室の音用して效陽とて不仁の二
字とあつた殿の一字より演説して後果のさる地と
堪破まへしとるは與叔克己銘と敵味方の用
ありし銘のゆゑとある格ハ陋室銘とて作り作を
尾城の史官よりして大崎氏の逸士ありと云

○註曰竹取の翁又つ万葉ニ長歌アリ奉ルに及ぶにれく
 子よ竹取の翁をいづくをれもしあり △櫻葉お
 りまらりゆりも場すれるあうけ生もト云に其詞
 フ互照して次ニ西行ヲ出スキ断續ノ事ナリ△富はらん
 らる國ハ益師ノ家ノ故客ナリ△東坡方戴笠乗野上ニ
 ル雪中國ハ和漢ニ多シ○たそ文津地ノ事ハ前ニ出
 詩仙最語ニ云重吳天雪履香楚地花 ○兼隆
 發自世よあももさるに河あめやとて哉

○ほまけ格を後集よとてこのまらり
 さりたえ禄甲成のえ伊笑の西林藤庵よとて
 又福十二箇の再授あうけ格も其の一箇也
 られし逢初め夜話よとて今やあそぬの逢文とて

傍向の藤栞と論よきも風國の泥船集の
 へ藤栞舎よきとて一人の信をいふはまらり
 今とて古文のきしひあらんきといひ自らの遺文
 ありとも我と我よまじりて格路の指よた
 ちあゆらん殿後の隠論をいふよとまらり
 けし室のうらふおあふの初春の在るあはれ
 何れよりあふのあひよあふとてまらりて様
 見えよの物事ありとていふまらり
 本尊寺此形見こけよ湖東の玉耶觀よはまらり
 差塚の石よはまらり格のあまらり
 或は武の翁の塚よとて此翁の形見とてまらり
 と別河集集よとてまらり我とてまらり

羽の青鳥一信するは嵐七の舞物よりさきさきとのり
とけらるる世の行ふありの存に遠き論の用と
也

賢鏡銘

而何仰

原夫世界之始者無鍛冶鑄物師之業
了其天圓地方也了万物各莫不身質
德事自矣中亦麼謂鏡物者傳儒仰神之
魂而遠照國家之政与近顯君父之道与
况向明暮之鏡而男者持髮之不暴心則
女麼嗜同許之有塩敷操而霖宛起死松

之二葉成月出度御代之媒了矣斯者和
五倫之中了則空麼謂鏡之天下一者矣
抑從正月之重鏡五九添月日之光了則
不矣四季折々之望花亦有水之成鏡了
鳥亦省翟之字歎了孰若不為凡雅之便
款者但聞儒行之孔夫子者七十而從心
所教其建置明德之鏡而若繁之伴達者
不為麼樂而不淫了哀而不傷了程子麼
所謂虛矣不時則可謂孔子無能語之虛
實矣耶初又佛家之教世尚高懸置淨玻

瑤之鏡而令眼地獄極樂了則八万六象
磨五面羅漢磨身入一寸四方之箱被照
智慧之鏡而唯心淨土了已心淨陀了去
此不遠與所矧夫神國之天照皇者生給
白銅之鏡則被為法岩戸之神樂而後給
于心之鏡居矣在者万之神遊建有
面而俳優之歌給則歌人連身之家者不
知俳諧亦者供神酒而不崇鏡之御數系
耶卡左有入道者懷入一寸之鬚鏡而密
看所見其鏡了年者所美也指了額部之

漣々波也。鏡之山磨近了則耻老曹森之
名而隨流而鬚磨不接增而可眼儒仁之
真義探神道之秘意耶。要文了雪且了御
花味月而及鼻毛之用心而已也

○註曰老子經天地之間其猶橐籥乎虛而不屈動
而愈出云橐籥八吹率たり天地方圓八前出也
△天下一作上鏡裏銘了了復八其銘の言凡種了了父
以下ノ之事三三五倫ノ裁断ラ見レキナリ ○古ト集音七
而了の後了ちのりかろとやろりしつ以
稱了了五字天和三直名ノ用了了去之彼各三水之鏡
ト續ク故三水之鏡ニテ花之鏡ニ非ス直名ハ成字ヲ

以テ水ノ鏡ヲ隔ル故ニ水ヲ以テ花之鏡ト成セリ去ル貞々
 伴勢物語人ヲ為被知ノ歌ノ年亦彼ヲ不不ト置
 ノ差別アリ但シ厚ト矣ト文和詞ニ勸アリ山尊ノ我歌ヲ
 見テ其鏡ニ舞フ夏ハ倍々多ク出タリ細奉ニ用
 ナレキ竟ハ花鳥ニ寄セテ鏡ノ風雅ヲ云々ナリ
 △論語七十
 而從心所欲不踰矩△大學之道在明明徳云△論語
 緇童紅紫不以爲服註紅紫近於婦人女子之
 服也△論語罔睢樂而不淫哀而不傷云詩經罔睢
 ハ夫婦ノ中好ま喻トク△大學明德註程子曰匪冥不時
 以見衆理而應之乃克者也按スルニ此結語ハ程子實字
 ラ語ントテ強テ我亦依ノ虚字ヲ奉テ明德ノ二テ證又
 ト成ヒル例ニ能諾ノ意地下知レ
 △淨玻璃鏡ハ佛經ニ

出テニ世通達ノ喻ナリト之按スルニ此起語ハ眼傍ノ面影
 ヲリノ相ノ一字ヲ散答セシメヤ法ニ隱見ノ絶妙ト稱スレ
 △寸四カト心ノ方オナリ唯心モ已心モ用ト知レ按スルニ
 句ニ大和ノ貞々各文ニ句讀ノ設アリ是ヲ漢文ノ字配リ
 云ハ被照ノニ字ヲ以テ爲入ノ上ニ置テ和詞ハ語路ノ
 遣アリテ上讀ハ十字ト成リ下句ハ五字ト成ル故ニ上ヲ八
 字ト成シ下ヲ七字ト成シテ句讀ノ長短ヲ配テテ此等ハ
 大和ノ新制表テ例ニ倣文ノ周曲ハ返点ナキ故ニ和漢ニ
 音訓ノ差別アリトノ前撰ノ百花賦ニ木瓦花ニ配アリ
 比丘尼ノ句讀ニ互見スレ△唯心モ已心モ淨土經ノ語ナリ前
 アリ△去ル不遠モ前ニ山ナリ
 △日本紀乃以老手持
 白銅鏡則有化出之神是謂大日靈尊云大日靈ハ

名月のたらしけく暮の上もあはれなく
 んはくちる。あし国の怨とみりて殿のほろ
 むたらちる。あしき扱をわくもあはれ
 なく。あしの月もあはれなく。あしき
 一まよなる。あしきあはれなく。あし
 のちきり。あしきあはれなく。あし
 の市に。あしきあはれなく。あし
 どの。あしきあはれなく。あし
 後者（ウラハシ）のむね。あしきあはれなく。あし
 あしき。あしきあはれなく。あし

駿河の因縁と信ふ。あしきあはれなく。あし
 冠る。あしきあはれなく。あし
 も。あしきあはれなく。あし
 ま。あしきあはれなく。あし
 あしき。あしきあはれなく。あし

○註曰。竹夫人。抱羞ノ言。各ニテ。卧内ニ。着テ。遊ル。調度ナリ
 或ハ。竹ノ。上ニ。青。奴ト。モ云。リトフ。▲（此。習。湖ノ。名。如。長。春。ノ。竹。生。鳩ノ。辨。入。天ヲ。指。テ。竹ト。夫。人ト。ノ。寓ト。ス。此。等。ニ。傳。記。文。用。ヲ。知。ヘシ。△。冬。夏。ハ。繪。張ノ。具。ナリ。傳。ニ。篋。字ヲ。用。フ。和。訓。ハ。瓜。又。カ。ビ。ノ。意。ト。ソ。△。白。雲。婦。ハ。東。坡。ノ。詩。ニ。アリ。夏。ニ。在。子。カ。無。何。有。郷。ト。見。ル。シ。▲。竹。ノ。子。ノ。抱。羞。竹。ノ。中。ノ。子。ノ。子。ノ。娘。

瓦器傳

河何竜

此も瓦器といふ物と混る流しの向よりして
 その容やうくその性ありてこれを天帝は
 しく非祇教教悉す常め其を此らに物と
 するのきりやれり人の代に酒をたしむる
 流草のまといひ何都常濟のまといひて種
 といはれはるる族ありき
 是とて我々の重寶記といふ器とかりけ
 といふ器と陶物の地各ちりてこれと和訓を

瓦器の二子を用いて喜訓の通語なる一と云子保
 年中に傳はるるや、岩戸の常衛
 二點のひらりと積るるや、ゆは所の
 ありきと和光のれいといふは、
 といふと燈灯仰のいりといふ、
 といふと十二かといひ万灯といふといふは、
 なくしてありなむは、物考の蓬業といふは、
 の婦考と被いといふは、二入の賤といふは、
 といふとが、といふと、
 といふと、
 といふと、

らうれきい。厚甲とはやち此名のごはつと。ふと
 常袋の紙中にもかくはるる由あり。殊の言
 てもいあると。か。厚甲は。はり。獲。あるれある。名。舊
 の根と。う。され。果。と。何。から。の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 して。し。られ。く。業。續。の。甲。せ。し。ま。い。て。い。ん。の。御。と
 一。部。も。あ。は。る。甲。は。行。業。し。み。の。と。く。と。あ。は。る
 今。も。あ。く。る。甲。く。と。お。甲。の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 ち。結。の。ゆ。や。ん。と。は。は。る。の。も。と。あ。は。る。と。あ。ま。し。く
 ち。る。ら。う。れ。き。い。の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と
 ち。り。の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者

院の所。又。御。の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 け。い。も。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 拂。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 くる。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 い。然。も。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 へ。し。に。御。作。の。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 ち。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者
 芥。川。の。名。も。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者。の。御。と。あ。ま。し。く。漬。物。醫。者

流るる身をたづねてまきちていそむるも
 花もいそむるてはる人よあちちとわ
 りそむるついでと事のはれをなほ
 柳のありしる影もいそむるは
 まちのありのちのちのちのちのち
 流るるもはれはれはれはれはれは
 るもいそむるのちのちのちのち
 りそむるのちのちのちのちのち
 流るるもはれはれはれはれはれは
 るもいそむるのちのちのちのち
 りそむるのちのちのちのちのち

さられたる身をたづねてまきちていそむるも
 花もいそむるてはる人よあちちとわ
 りそむるついでと事のはれをなほ
 柳のありしる影もいそむるは
 まちのありのちのちのちのちのち
 流るるもはれはれはれはれはれは
 るもいそむるのちのちのちのち
 りそむるのちのちのちのちのち
 流るるもはれはれはれはれはれは
 るもいそむるのちのちのちのち
 りそむるのちのちのちのちのち

世ありまゝぬのあずりよぎらうかろくゝるるがらぬ
うとありまゝけしむるまゝいれし子さるゆらうとあり
はらうもあけあさうとむげうと世のあわいし
ちるまればるまゝ芝草まづ樹の枝はたありせぬ
たのめは人くくを月ひのあいにちまるとのひく
まはりまゝかげしをまゝいゝるまゝぬ

○註曰△浪化君、東門跡ノ連枝ヲ越中井波ノ瑞泉寺ニ住シテ
官号ヲ應真院ト云ク標号ヲ應々山人ト云リテ、
元禄十六年癸未ノ十月九日ナリ。○行末幸ト云ク、
子人ありまゝあけしをまゝいゝるまゝぬ

△御明本傳備前中下ニ王弘ト仗ラテテ重陽ニ酒ヲ贈シテ

アリ△粟花和浩あうく北河園梨もまゝてまゝのくゝあり
△金沢ノ別院公安江町ニ在テ井波より十二里ナリ△親方上金沢
ニ津田家ノ智将君ナル故ナリ○源氏相奩がまをゆしれ
る吹むまゝあけしをまゝいゝるまゝぬ
中秋とく子字ノ寄ナリ男子ト女子トニ方アリ △ゆきまゝいゝ
奇書詞ニまゝいゝるまゝいゝるまゝぬ
万子ノ標号ナリ此公金城下ニ文遊武備ノ名ヲ傳テ祖翁
腹蓋ノ盟ヲ残シ先師ト忘年ノ交ヲ結リトク○枯尾花集
祖翁ノ難波ニテ病中吟ニ旅しまゝしるまゝを花向とけり
まゝいゝるまゝあり△凡雲ノ詞ハ謝天運カ澤泊ノ遊情ヲ採ル
ニマゝ遠傳ニ尋へし△向宗内ノ改悔詞ニ難行難修ノ志
ヲ振リ捨テ唯一心ニ阿弥陀如来ヲ頼ミ奉リトアリ難行ノ

こと文一轉換のたまうる虚言を削めたりとて
 之の去年の秋ちもろく各草のふれし虚言のり端も
 又復とけし二れありとてけし人集れ達天さの
 と云はくやと作の文符ふけ類の艶曲も又去年あり
 して予ち此去まといふはありとたれも中にも今れ終まの
 がくもあやうにたぐあれあれと未練のまをのけ艶
 人もあつて耶那いあやうとまふもあつて本朝の世
 にもさうおされしものもはもの第にもあつて
 とこの文操も再撰して新法も常用の法といふと
 あつていふはくといふ折のさくといふはくといふはく
 の各ともたれと削りて決の虚言はくといふはくといふはく
 のまといふはくといふはくといふはくといふはくといふはく

雅俗をまぐのまじりたりとまふに減し何所の
 右切ちり世にと一部の責難あつたりと

雲鈴法師行状記

蓮二房

こと傳くは雲嶺法師を奥州南部の素直に
 本名家の侍部よりしる官達の虚言世といひ
 旅を武陵へ雷根子とてやまひ中比を湖津に
 びを井の社といひしはあつて俗といふは
 ほとよといひ色といふはあつて鼓吹の法をいふは
 こと年といひるものといひしはあつて飲中の請仙

息のきくむむねとまかしくはういぬれんといふ
 へきつ二つこのかたうらみの我のそくし辞世あり
 せがりのとあのをせし二月二日家 ちんちん
 けれと一たの人ととえあうらあうらの砕らふおぼや
 のらおれまのこあまうらあれとあはらふらふら
 と息をとりあまむく人いあうら午の時
 入息をとりて砕つる色あひまをまじけらうりて眼
 けらうらうらくくあうらあうらうらうらうらうら
 終末のまぬくまげらあうらあうらうらうらうら
 けらうらうらあうらの識文うあうらうらうらうら

一々いしと値遇の積縁うらあまうらうらうら
 奇特あんととせうとあうらうらうらうら
 洛の渡吾仲の墓誌文と流うらうらうら

○註曰雷柱子の武其角カ標号なり或ハ雷柱は云々
 并ハ湖東ノ七野ノ宿ニ在リ東阿佛ノ山在ナリ梅を結社
 上戸山ノ白蓮社ノ詞三次ニ例明ラ出スキヲ
 為ニ鼓波草ヲ五斗ノ末ニ不屈腰解ニ印後ニ而然故猶
 云々●飲中八仙詩ニ臣是酒中仙云々其註北天上謫仙人也下
 云々謫上流罪ノ義ナリ 史記曰負士之處世賢者雖
 在ニ囊中ニ其先立見梅をニ世對ハ在兼雖ニ後語ヲ和ナリ
 梅をニ後語ヲ對セル其ト云々浮ト云々包ト云々曲ト云々
 字對ニ意對ハ更ニ言ハス雖ト雖トノ自修對ニ格ヲ轉對

到素の曉しつりて坐服まことの自在なるゆゑに僧の
酒色にあらずいふくかく僧の優游と云ふは
和漢の遠近よりあらず市宇の大徳をいふ
ゆゑに仙の詩より酒中の大仙と稱す(玉色)

茶之田并万靈文 渡部狂

南無之界万靈無貴分無賤分有縁摩無
縁摩從儒佛危在之聖冥至詩歌連俳之
亡者這旅霖蓮葉一枚而不厭獅子庵之
侘者不重于抹香之臭分不生於宿禰之

花言一言芳談之不事欠無則為露分爲
起分尽俳優而不包又採一部之虛實令
懺悔字者髣髴之所以矣懺悔介者誘引滅
無量罪與哉相謂俳諧之馳走者不冷素
麪分不飾團子分煎茶者入遇名花輪遠
而茶漬者面々之減吹才也斯言則乘佛
於之味線而為似口而為馳走其言語者
謂孔子之一藝居謂釈氏老家之口過居
花咲一體万用則實成万法一理與好此
故俳諧者令贊談矣有諫矣言有道了也

乍去言諾之遊者認虛認實人之假令抑
 下我身而直人之草履共言則為似瓦器
 置鋪而振舞針之和物厚充有者認一言
 之實而不知万物之虛故也不實之實與
 不虛之虛者兩為之道一致之秘法厚哉
 就中俳諧師者常欲攔仙家之迂詐崩儒
 行之真言譬信則知為大名之仙人之不惜
 孔子兮不泥秋如兮蒼花兮毀身兮知其
 日其時之變則付檀那之核嫌而欺其事
 此事欲是以論語尔麼謂君子可欺居後

語尔者謂詞之遊敵歷所註者所謂滑稽
 之贊和線五倫面通味也今夫謂懺悔之
 大秘事乃有以度於文操之選場而註者
 與評者之虛實也今歲肉柳子虛之戶而
 欲撰例之草稿月忽有二人之客而鶴髮
 之叟謂自有仙居黃衣之用謂博望司歷
 博望者實麼註者回而其面藤敷自有者
 何樣評者類而其容老矣率厥好思儒仙
 之万卷則畢跡羅山屈之撰集尔麼上罪卸
 鏡而阿難融入於鑰穴而以如是我聞之

四字擴久殊音質之智慮兮顯觀音勢
 至之通力兮其餘之天人麼毫玉麼乍在
 涅槃像之繪其後無為達人身矣于然面
 儒行之沙汰則遠乍刪詩正樂近至自撰
 之論語而以述而不作之四字竊比於我
 老教與者曰竊兮曰我兮爰採給一代之
 虛實則行人違者認例之實字而為指定
 高大夫共老與戲者寓二人之面影而所
 謂神變權化之師尔哉儒家之七師麼歟
 行之七佛麼可知有名無相之證據人也

物而瘧歟如孔子之文而令穿鑿證人之
 名判則為似折檀林咄之中而詰言棄之
 散乎以耳於聞万卷之表以心知一字之
 衷了哉于時身有仙麼博望司麼矣々頽
 合而不諱一部始終之脊折急度演茶漬
 之一礼而傳鑿者棄甄子之真則為有名
 棄茄子之牛而飛去西之大虛了矣享保
 丁未秋七月孟蘭盆日狂等噓之輪川之
 流效源由供養之摸樣而和兮漢兮連詩
 兮誦歌兮斯者吊胸七之跡歷今將所存

此世一人之慶慰也。此余文而朝食之露。之稿妻之數。不各狂言綺語與也。

○註曰一言芳談聖光上人詞。此世一人之慶慰也。此余文而朝食之露。之稿妻之數。不各狂言綺語與也。古語拾遺ノ取意ナリ前ニ出タリ△悲華經慙愧懺悔滅魚目混珠云△花輪遠トハ文也△即ニ義濃ニ整長ノ各産ナリ△論語言語宰我子貢云四科ノ中ニ藝ナリ△按スニ世一段ハ花文ニ子ニ用アリテ万ノ轉回ヲ稱スナリ△史濟物直傳優子孟琴久常以談笑ヲ諷諫△優孟稱贊善爲笑言然合大道云△涅槃經佛法所屬國王大臣有九檀那△阿含經預知後婦云按スニ此二

段ハ諫者有リ五美五諷諫唯度主而行之ト云元孔子家語ノ取意ナリ△論語君子可欺不可罔トハ宰我ト及言ノ巧ヲ責ルナリ△遊敵トハ双帝ノ詞ヲ物諱トテ遊フナラシムヘリ△按スニ俳諧所以下ハ諷諫ノ意ヲ及テ漢ノ武帝ヲ諫スル事方朔枚舉カ面敷ラ云ルニヤ畢竟ハ削ノ面通味ナリ△大論仏經ノ選場ハ竹林精舍ノ畢益羅窟ナリ阿難モ迦葉ノ余ヲ承テ論際ヨリ這入テ何如ク説法セシト大衆ニ提テ知是我聞ノ發語ヲ直ケリトフ速而不作ノ辭宜ク察スシ△論語序乃叙書白傳ニ礼記刪詩正樂△論語述而不作信而好古禮比於我者鼓△註云鼓商賈大夫見大戴禮△按スニ儒學子有八其書ノ受否ヲ乱スヨリ其人ノ有無ヲ究トス總

天宮子ノ書ト云ヒシ山崎老人一貫抄ニ并紀ト世本ト云リテ
 老鼓ハ二人ノ寓ヨサは合ナリ老子ト軒祖トノ面影ニ寓テ古賢ヲ信
 スルノ證文トフ△孔子ニ七人ノ師ト云イ釈迦ニ七人ノ授記ト云フ
 ハ總テ諸經ノ取意ナリ細考ニ暇アラス△檀林トハ輕口ノ嗤シラ
 云リ宗因以ノ誹謗ヨリ天和比ノ常談ト成リ△傳語拾芥
 此茄ヲ馬牛ト訓ス茄子キヤス瓠子トハ禪錄ノ詞續ナリ△傳中
 供養ハ詭物ノ名ナリ傳中ヲ始トシ六十余帖ノ寓ヨサはコラ
 拳ヲ石山ノ湖水ニ供養セシ様ナリ△其詭キもこのゝる編
 書ノ氣ツレウあゝと云々あり△感云ね言綺語とあり
 持テは某式部ノ後ノ世ト云々あり然レトモあり
 ○漢云けいふを合く誣謗なしく文擇フ一部の趣向を
 傳書仰好の新論とあり一係文漢詩の似式とあり

どのつゝ自さむち他と云へしとてまのて我やと違へり
 けり儒佛の居たる一なる建之の意地ちりも甚し弱憂
 の自譏フの地極クめりさなるも言決めや用
 とまらん今も文擇のさ當とてしめされはあやふし
 ね言とはより一部の跡をさるあり一漢一帛章
 の二聖廟と云れ終焉迄も文の畫去と云へて大和
 優格の衰然と云ふ一行はたも文の死活と云へ
 て我らぬも此筆のさ力とありさしと云れ今此も文
 とい例も此格のさいさと字削も此筆かかゝると
 是とて一射万用の詞也とい方法一理の心の強
 むや南すの始り綺語の終なりと云へて十成の
 能備辨といへし中より和漢文擇と擬名と真名

此通用といふところも我々の平話なれど
 和漢と一枚の繪圖のこゝと柳子庵の文庫より
 写し立てし爾雅篇海のありとけりといふこと
 併呂波韻一冊といふは中の増とあけむる也

享保十二年 未秋九月如意珠目

洛陽寺町押小路

橋屋治兵衛持行

書目林

一本朝文鑑
 一俳諧十論
 一和漢文操

俳書目録
假名文集 全部十卷
新古今評論 全三卷
假名真名文 全七卷

一新撰大和詞
 一十論為辨鈔
 一和漢百化賦

日本歌語辭 全二卷
十論秘說 全三卷
全一卷

一發願文

東花坊撰 一卷

一七子竹丸

一卷 里冬

一夕歌の歌

一卷 山入

一山琴集

二卷 幽今

一菊十歌仙

一卷 伯免

一八夕暮

一卷 乃露

一梅のしうけ

一卷 吾仲

一四幅對

一卷 東怒

一東海道

二卷 何狂

一獅子物狂

二卷 山隣

一雜陳二百韻

一卷 蘇舟

一淡雪集

一卷 鷺洲

一本朝八仙	二卷	昇角
一鎌倉海道	二卷	江戸干梅
一糸魚川	一卷	九軒
一八鳥放生日	芭蕉翁世二面 三卷	野城
一鴨矢立	一卷	鴻笑
一桃首速	三卷	雲石
一草のり	一卷	一字
一三千化	芭蕉翁三十二面 四卷	蓮
一鯽俵	二卷	盧白
一姫の式	一卷	免路
一雪白川	二卷	魯九
一文月往来	一卷	嵐枝
一くしのすゝみ	一卷	吳天
一六の花	一卷	以之

寺町通二条下町 書肆 偏屋治兵衛 扱

